京都漱石の會機関紙『虞美人草』第５号原稿

テキスト中心の漱石・コンテキスト中心の子規

伊藤　洋

「とかく大兄の文はなよなよとして婦人流の習気を脱せず、近頃は篁村流に変化せられ旧来の面目を一変せられたるやうなりといへども未だ真率の元気に乏しく、従ふて人をして案を拍て快と呼ばしむる箇処少きやと存候。総て文章の妙は胸中の思想を飾り気無く平たく造作なく直叙するが妙味と被存候。（中略）故に小生の考にては文壇に立て赤幟を万世に翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず。思想中に熟し腹に満ちたる上は直に筆を揮って、その思ふ所を叙し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず。文字の美、章句の法などは次の次のその次に考ふべき事にてIdea itselfの価値を増減スルほどの事は無之やうに被存候。御前も多分この点に御気がつかれをるなるべけれど去りとて御前の如く朝から晩まで書き続けにてはこのIdeaを養ふ余地なかるらんかと掛念仕る也」

「婦人流の習気」とは、男女共生社会の今日適切を欠く表現だが、明治22年大晦日、郷里松山に帰省中の正岡子規に宛てた漱石書簡である。子規が書いた『七草集』について漱石がこっぴどく批判したものだ。『七草集』とは、子規が、苦手の英文を除く7種類の文体を駆使して書いた創作で、この年5月1日に脱稿するや、あろうことか第一高等中学校（後の第一高等学校）の級友らへ手当たり次第に配ったものである。「わしはこんな芸当ができるとよ」と、得意満面、自分の才を大いにひけらかしたのだ。その驕りの天罰はてきめん、この1週間後に彼は最初の喀血に見舞われている。

それにしてもこれは実に完膚なきまでの批判である。この二人の天才は、明治35年、終にその一方が34歳の若さで身罷るまで、途絶えることなくこういう

歯に衣着せぬやり取りを続けたのだった。
上記書簡の後、子規の喀血に驚いた漱石は一時献身的な支援に転ずるのだが、病状が回復するにつれて二人の間に激論が再開されるようになった。この間の事情については、子規の反論が残されていないので想像するだけだが、子規もせいぜい分の悪い言い訳はしたようで、それに対して漱石は翌年正月早々、松山に帰省中の子規宛に長文の手紙で追い討ちをかけた。

「『七草集』「四日大尽」「水戸紀行」その他の雑録を貴兄の文章と也。文章でなしと仰せらるれば失敬御免可被下候（しっけいごめんくださるべくそうろう）」という皮肉の書き出しに次いで、「文章is an idea which is expressed by means of words on paper 故ニ、小生ノ考ニテハideaガ文章ノEssenceニテwordsヲarrangeスル方ハelementニハ相違ナケレド、essenceナルideaホド大切ナラズ。経済学ニテ申セバwealthヲ作ルニハraw materialトlaborガ入用ナルト同然ニテ、コノlaborハ単ニraw materialヲmodifyスルニ過ギズ、raw materialガ最初ニナクテハ如何ナル巧ノlaborモ手ヲ下スニ由ナキト同然ニテ、ideaガ最初ニナケレバwordsノarrangementハ何ノ役ニモ立タヌナリ」

この手紙の主眼は、先の書簡にあった「胸中の思想」なるものを改めて説明することだった。つまり、漱石が言いたかったのは、子規の著述は「rhetoric」の過剰な割には「idea」が貧弱であるというのである。その貧弱な「idea」を涵養するには「culture」が重要であり、そのためには洋の東西を問わず広く文化を吸収しなくてはならず、そのためにはしっかりと読書などをしなくてはならないと説くのである。弱冠22歳の青年の青春の客気がほとばしり出てくるような文章であるが、ここからこの二人の才能の在り処も見えてくる。

文化記号論の中に、「テキスト中心」と「コンテキスト中心」という分類がある。人が他者とコミュニケーションをとるときには、伝えたいメッセージを「コード」を使って作成する。最も多用されるコードとしては言語があり、日本語がある。メッセージをコードによって作成するときには、辞書と文法を参照しながら作成する。こうして作られたメッセージは、できるだけ雑音にさらされないようにして相手に送信される。

受信者側ではこのメッセージを、送信者が使用したと同じ辞書と文法を用いて読み取る。この辞書の普遍性のために公教育が用意されている。メッセージが送受信者の間で正確に伝達されたときに、両者の間の情報量（知識）が同一となってコミュニケーションが終了することになる。

これが理想的なコミュニケーションであるが、必ずしも絵に描いたように理想的には行かない。それは、人が持っている辞書の優劣やら、人がしばしばコ

ードを踏み外す特性を持っているからである。
法律の文書や機械器具の取扱説明書、コンピュータのソフトウェアなどは完璧な情報伝達が要求されるが、人間にそれを要求するのは酷である。第一、面白くない。しかも、この理想的なコミュニケーションは発信者側が絶対的な地位を得ているという意味で受信者側には自由が無い。
他方、犯罪捜査をする警察官や、当たるも八卦・当たらぬも八卦の占い師などは、広く人間社会で用いられるコードや文法によって仕事をしているのではない。犯罪事件なら、刑事は犯人が残したありとある「証拠を読む」ことになるし、易者は客の態度、顔色、物腰、着衣などをコードとして「推理して」いる。これらほど極端ではないが、医者も様々な検診データを下にして「診察して」いる。いずれも発信者側がメッセージを意図せずに発信しているものから読み取るので、これは「解釈」というのが妥当である。
これら二つのコミュニケーションは極端だが、前者を「テキスト中心」、後者を「コンテキスト中心」という。「柿食えば/鐘が鳴るなり/法隆寺」というメッセージは、これをテキスト中心のメッセージと解すれば「柿を食えば法隆寺の鐘が鳴る」という情報を伝えている。もし、作者の意図がこうであれば、これはすぐに反故にして屑篭に棄てる程の無価値な情報である。時は秋、葉の落ちた柿の木に赤く色づいた果実が枝もたわわに実っている。作者の耳に、遥か彼方の「法隆寺（と思しき寺）」から、幾星霜を隔てた古代の鐘の音が聞こえてくる。カキ/クエ/カネと矢継ぎ早の/ｋ/音が柿の食感までを与えている・・・と、こう見てくるとこの句は、無限な情報量を持っていることが分かる。俳句のような短詩系の文学は、言葉数が少なくなるだけrhetoricが多用され、コンテキスト依存性が強くなる。他方、散文はテキストを多く使って、曖昧さを減じ、受信者の解釈の幅を狭くする結果、作者のメッセージ性が強化されテキスト中心となる。さいわい子規のこの句に良く似た漱石の句「鐘つけば/銀杏ちるなり/建長寺」がある。鐘と建長寺の庭に落葉する銀杏葉の3者の見事な説明は、漱石のテキスト制作者としての有能さの証である。二つの句を絵葉書に描くなら、前者は秋の夕暮れに沈む奈良盆地全体を、後者ではせいぜい建長寺の庭に限定して描けばよい。同じ17文字が描く空間の体積が全く違うのである。どちらが良い句と言うのではない、両者の記号論的な相違はこのように歴然としている。
漱石と子規、この二人の天才はまさに正確なメッセージを発したい漱石と、コンテキストを共有したい子規と、文学に対して真反対の志向を策していたのであろう。先の手紙は、二人のメッセージ表現の方向性の根本的な相違が伏在していたのである。
この二人と、二人が死ぬまで濃く淡く邂逅していた虚子の著『漱石氏と私』

に次のような記述がある。時は上述の書簡が往復していた時期、松山にいた子規を訪ねて漱石がやってきた時に虚子もお相伴して、その折の虚子の感想である。「ただ何事も放胆的であるように見えた子規居士と反対に、極めてつつましやかに紳士的な態度をとっていた漱石氏の模様が昨日の出来事の如くはっきりと眼に残っている。漱石氏は洋服の膝を正しく折って静座して、松山鮓の皿を取り上げて一粒もこぼさぬように行儀正しくそれを食べるのである。そうして子規居士はと見ると、和服姿にあぐらをかいてぞんざいな態度で箸をとるのであった」

明治文壇の基礎を作った二人の天才の豊かな個性がほとばしっている情景である。（文中の傍点はすべて筆者）